





イラスト Web 編集・ろっぼん

灰ならし



むがすむがす、ずうっとむがす
村はずれのある古寺さ、毎晩、化け物出るんだど
寺の和尚様、いくら一生懸命に拝んだって、毎晩
化け物は出てくるんだど



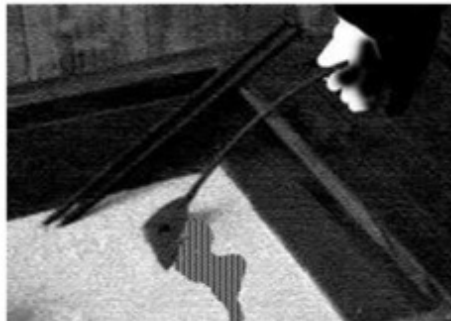
男とも女とも得体の知(しゃ)
ね、幽霊と化け物とも、みわけ
の つかねえ化け物で、
そして出てくつと、歌のようなも
のを、ブツクサと詠(よ)んで
いつまでもブツブツ声立てて
いんだど



「そうか、では、オラ、が行ってみっぺ」とお寺さ、来てくれてな

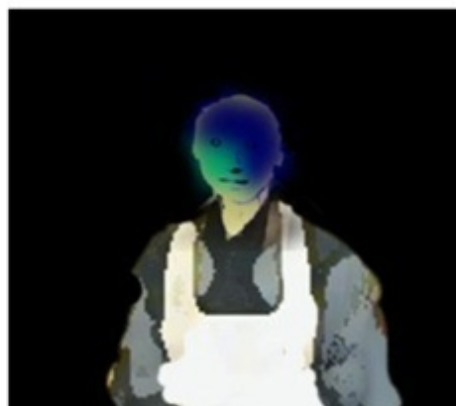


そして寺の仏像の影さ、隠れたれば、夜
中に出て、
男とも女とも見分けのつかねえ、それはそ
れは青白くって気味の悪い化け物だっけ
ど



そして炉端さ、べたんと座って、炉の灰、一生懸命ならしながら
ブツブツ歌っこのようなを言ってから
—よく聞いていたっけ
「灰ならし 灰は海辺の 潮にけり……
灰ならし 灰は海辺の 潮にけり……」って なんべんも同じ歌をくりかえしていんだど。

<青年僧の回想>



肌寒き夜わたしは炉端を見つめていた
すると灰をならした跡が海の波に見え
自然に「灰ならし 灰は海辺の潮にけり」という上の句が浮かんできた
何とかこの句の下のを完成させようと懸命になっていたら炉端の火が消えたのを
気がつかないで
考え続けたいた。
そして朝方、ものすごい悪寒(おかん)におそわれて、わたしの身体はもう彼岸(ひが
ん)へと旅立っていた……。



「それ以来、わたしは埋葬された、こ
の寺の炉端に」
「毎夜、出てくるのか」と歌詠み名人
が声をかけると

「そなたは？」と聞き返し
「そなたと同じ歌詠みの端くれじゃ
さっきからきいておったのじゃが下
の句を思いついたぞ」

「おお！是非、下の句を教えてください！」
と歌詠み化け物は名人に懇願した。

歌詠み名人は朗々と歌を詠んだ。



囲炉裏も海か 沖を眺むる～

と詠(よ)んで、下の句、つけてやったんだ。

「沖は」囲炉裏の「燠(おき)」、火を焚いたあとに残る炭火のことだぞ「燠(おき)」を

「沖」と懸(か)けて詠んだぞ！

どうだ名人の歌ウメェベ！

「灰ならし灰は海辺の潮にけり

囲炉裏も海か 沖を眺むる」……と下の句つけたれば、りっぱな一首になってな！

化け物も灰に吸い込まれるように消えて行き

それから二度とその寺に化け物出なくなっただ



こんで よんつこもんつこ さげすた

(これで世の中伊達一門は栄えました。)